



TITLE:

ナポリまで

AUTHOR(S):

荒木, 俊馬

CITATION:

荒木, 俊馬. ナポリまで. 天界 1929, 9(98): 304-307

ISSUE DATE:

1929-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161408>

RIGHT:

ナ ポ リ ま で

荒 木 俊 馬

昭和四年一月二十二日（於上海）

東亞大旅館と言ふ支那の旅館に投宿仕候。一室に二ツベット有之、一つは東京帝大の木内先生。今天七點起床仕候。ボーイを呼びて『與我們早餐』を申し候處、小生の支那語は北京語なる爲にやさつぱり通ぜず候。即ち鉛筆を紙ををりて『早餐』を書き候。ボーイが「麵」を書き候間小生はうなづき申候。「火腿」を書き候間小生はそうだ、兩個麵火腿を申候。唯今その早餐の來るを待ち居り候。果して如何なるものをもち來り候か。

（第一信）

一月二十六日（香港より）

春は今花さき亂れ、山蔭に鶯の啼き微風蕩蕩、海は藍、空は碧。いづこよりか妙なるピアノの音のひゞきまひり候。唯今香港のヒークの山上、ピークホテルのバルコンにて紫の煙をふかせ居り候。蘇鐵、棕櫚、何と言ふ名か知らず、黄色き、又白き、紅き花無數の鉢に咲き亂れ居り候。眼下は香港灣に御座候。夢の如く浮べる島々に時も春、人も春、心も空に、異國の情調に先づ心ゆくまにしたり居り候。（第二信）

一月三十一日（シンガポールより）

海上眞に平穩本朝未明新嘉坡に到着仕候。午前九時頃上陸自動車を馳りて馬來半島ジョホール王國の首府ジョホールをたづね候。炎熱日本の極暑を等しく御座候。椰子の樹の森、護謨の林、鶯の聲逃けて樹上に攀ち登る猿の姿なき熱帶の風光はここの外によろしく候。ジョホールにては王宮を見、マホメットの寺院をたづね候。アラールの神は何處にゐるか。知らず、たゞ碧空に猛威をふるふ赤道直下の太陽の赫灼をして輝くこれあり候。故國を離れて十五日、又明朝は此の地を去り西航仕る可く候。諸君の御健康を祈上げ候。（第三信）

二月六日（コロレボより）



シンガポール



セイロン

二三日前、印度洋の其中以二三人と共にビールを痛飲仕候。大分メートル上り候て、居合はせた二十一歳ばかりのロンドン生れの青年ミ馬來人の宣教師をこつつかまへて、大ひにクダをまき候。但し英語にて管まきしは小

生れて始めてにて候。少し酔がまわるこ語學に對する「遠慮」なるものが全くなくなつてペラペラミブローケン、イングリッシユを列べたて候。恐らく同じ事を何ども繰りかえしたる事ならむこ存じ候。議論の題目は人種論を、宗教論にて、馬來人こ日本人こが人種學上及言語學上非常に似て居る事を論じたまではよろしく候ひしが、宗教論から飛んで理論にいたり。「基督は最後の晚餐に於て葡萄酒をのだんぢやないか。然るにクリスチャンは酒をのまぬのは如何なるわけだぞ」こキツ問仕り候處、「あれはアルコール分をふくまぬ酒だ」こ答へ候。

南十字の星座の東南海面より上るのを見候。結局一つの星座に候。然し印度洋を航海して見なかつたこ言はれてもこ思つて、眠いのをこらへて十二時過ぎまで起きて觀測仕候が南十字から帆座へかけての南天の銀河附近は仲々美しく候。銀河のトバツチリも見え候。二三日前の或る夜、次の如き詩を作り候。

印度洋にて

果しなき海の彼方に	沈み行く陽を追ひて
我船は今し行く	黒き潮路を
夕雲の二筋三筋、棚引きて	紅に朱に黄金に錦織り
海原は風ぎ渡り	波もたゝなく
夕風はそよらそよらこ	海渡る旅の子が
頬を過ぎ行く。	

夕闇の落ち垂れて	行く方に白金こ
ヴァイナス光れば	眠りより醒めよこばかり
三つ又二つなつかしの	星ぞ見え初む。

北空にカシオペヤ	低く懸りて
極星は海面も近し	オリオン三星高くさえかえり
天狼はこれにつゞけり。	南空の彌々遠く
天の河落ち垂れて	カノブスのまたたきも

アケルナールの閃きも
赤道の下、旅の子が
ための心か。

冬にして冬ならぬ
夜の愁をなぐさめむ

あこがれの南十字は
あな不思議
南海の遙けき果てぬ

まだ出でぬに
見知らぬ星のあかあか
上り來こ心躍れば

あらずあらず
いづこの國の、はた
知らず。海渡る

いづこより又いづかたに行くらむか
いかなる人のあやつれる
外つ國船のあわれ燈し火。

（第四信）

二月十二日（ソコトラ島附近にて）

二月七日の夕刻コロomboを出でて一週間水天髭髯の境にまひり候。南十字は其後見す。いつも南方の空に雲の迷ひ居る爲めに御座候。カノブスやアケルナールは毎夜の無聊をなぐさめてくれ候。昨日は印度洋とアラビヤ海の境にて神武天皇紀元の佳節を祝する爲めに晚餐に紅白兩葡萄酒を供へシャンパンの祝杯を挙げ候。日本人五人、他はみな外國人に候。シャンパンの杯を舉ぐるにあたりて不肖立つて怪しき佛蘭西語にて十分間ばかりテーブル、スピーチをなし候。けだし航海の不聊をなぐさむる餘興に候か阿々

（第五信）

二月二十六日

南歐ナポリの言葉ほご甘くして音樂的なるはあらず。マンニョカヴルロの家は星霜百幾年を徑たり。大理石の家の中、朝、陽はヴェスビオの上高く昇りたるにウツラウツラミカブリの夢を見れば「アレ、ソット、アレ、オット、シニョーレ」此呼びて戸をたたくはカメリエレなる十三四歳のラガツチーナ（少女）なり。「オ、カピト、グラチエ、モルト」此答へて起き出づるは余が此頃の習慣となりぬ、やがて「アリア、カルダ」此言ひて湯をもてゐるは鬚そらむ爲めな湯也。顔を剃り洋服を着終りてソーファに椅子て紫の煙を喫する頃カツフェラツテ、エ、ハーネをもたらず。

南歐拿破里の朝々はかくの如くに御座候。

（第六信）